

科学技術・イノベーションにおける国際戦略：頭脳循環や国際連携の戦略的強化に向けて (中間まとめ)

現状認識・背景

- ・生成AIをはじめとした先端技術の進展速度が加速度的に増大する等、科学技術・イノベーションは国力の源泉として、その重要性が一層増している中、地政学的な変化も相まって、**国際的な人材獲得競争、先端技術の獲得競争が激化**。
- ・現下の情勢において、**我が国の研究力を強化する上で、優秀な研究者を育成・集積させる国際頭脳循環や国際連携の戦略的な推進が重要**。
- ・同時に、**研究インテグリティ及び研究セキュリティ**に配慮した上で、**国別・分野別の中長期的な連携戦略**もこれまで以上に重要となっている。
- ・他方で、**開かれた研究環境**の中で、研究者が国際的に連携した**自由な発想に基づく研究**を通じて、科学が発展してきたことは自明。
- ・こうした背景の下、国際頭脳循環、国際連携の戦略的強化に向けて、**中長期的に必要な国際展開施策をまとめ**、具体的な施策の検討へと繋げる。

中長期的に取り組むべき事項の方向性

※ 令和6年12月 科学技術・学術審議会 国際戦略委員会「科学技術・イノベーションにおける国際戦略」（別添）を合わせて参照

- ・我が国の研究力向上に向けては、**国際共同研究や海外研究者受入れ・日本人研究者送出し等**を通じて、**我が国の研究者が国際的な科学サークルに参画し、競争・研さんし、その研究力を高めていくとともに、海外の研究者等と共に最先端の研究活動を進めていく**ことが不可欠。
- ・そのためには、研究インテグリティ・セキュリティを確保しつつ、**開放性を持った魅力ある研究環境の構築や国際連携の強化**を進めることが重要。

開放性を持った魅力ある研究環境の構築、国際連携の戦略的強化

開放性を持った魅力ある研究環境の構築

(主な事項)

- ・「**世界のアカデミアに開かれた国**」を国際的に明らかにするため、開放性を持った研究環境を確保し、ボトムアップによる**学術交流を引き続き強化**
- ・**留学生や海外研究者等**に、魅力あるキャリアパスや雇用機会を示し、優秀な人材を惹きつけるとともに、**我が国に留まり活躍できる機会の提供**
- ・米国等の情勢を踏まえた国際頭脳循環の取組強化（**J-RISE Initiative**）
（主な施策：グローバル卓越人材招へい研究大学強化事業（EXPERT-J））
- ・留学の促進含め、**若手研究者や大学院生等の海外送出しの戦略的な増加**
（主な施策：海外特別研究員事業）



国際連携の戦略的強化

(主な事項)

- ・**国際科学トップサークル参入**に向けた、**G7諸国や欧州**といった科学技術先進国・同志国との戦略的な連携・協力等に対する継続した支援
（主な施策：ASPIRE、SICORP、Horizon Europeへの準参加）
- ・**ASEANやインドをはじめとしたグローバル・サウス**との知的交流による**優秀な人材の育成・確保や地球規模課題の解決**に向けた継続した支援
（主な施策：NEXUS、LOTUS、SATREPS）
- ・様々な交流を通じて、国際情勢を把握するための情報を収集・分析・調査

ASPIRE：先端国際共同研究推進事業/プログラム
SICORP：国際科学技術共同研究推進事業
NEXUS：日ASEAN科学技術・イノベーション協働連携事業

LOTUS：インド若手科学頭脳循環プログラム
SATREPS：地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム



研究インテグリティ及び研究セキュリティの確保

- ・研究コミュニティにおいて、自律的に研究インテグリティを確保できるよう、関係者が連携し、必要な取組を徹底
- ・研究セキュリティについて、国内外における情勢の変化等に応じて、研究コミュニティと連携しつつ、継続的な検討を実施



➡ 各事項の実現に向けた具体的な施策について、継続的に検討を実施

科学技術・イノベーションにおける国際戦略：頭脳循環や国際連携の戦略的強化に向けて
(中間まとめ)

令和 7 年 11 月 10 日
科学技術・学術審議会
国際戦略委員会

1. はじめに

(文書の位置づけ)

- 我が国の研究力の強化に向け、我が国の研究者が国際的な科学サークルに参画し、競争・研さんし、その研究力を高めていくとともに、海外の研究者等と共に最先端の研究活動を進めていくことが不可欠である。本文書は、令和 6 年 12 月 20 日に国際戦略委員会にて取りまとめた「科学技術・イノベーションにおける国際戦略」(以下、「前回取りまとめ」という。)や昨今の科学技術・イノベーションに係る国際情勢の変化等を踏まえつつ、そのために必要な頭脳循環や国際連携の在り方という観点から、短期的・中長期的に取り組むべき事項等を検討するものである。
- なお、内閣府や文部科学省において進められている、「第 7 期科学技術・イノベーション基本計画」の策定に向けた議論の状況も踏まえたものとする。

2. 前回取りまとめ(令和 6 年 12 月 20 日)からの国際情勢等の変化

- 前回取りまとめ時点においても、米中対立やパンデミック、ウクライナ情勢やイスラエル・パレスチナ情勢など、国際情勢の不確実性、不安定化する世界情勢を背景としていたが、令和 7 年 1 月の米国新政権の発足による米国の政策転換や、令和 7 年 6 月にはイラン情勢の深刻化等、その国際情勢はより厳しくなっている。
- そうした中、科学技術・イノベーションの観点においては、特に米国における米国衛生研究所(NIH)や米国国立科学財団(NSF)の研究助成金の見直し等、世界の最先端研究をリードしてきた米国の研究環境に大きな変化が起こっている。英科学誌ネイチャーが令和 7 年 3 月に行った調査においては、研究活動への締め付けを強める米政権を理由に「米国を離れることを検討している」と回答した割合は 75%に上ったとされており、若手研究者を中心にその頭脳の集積に地殻変動が生じようとしている。
- 生成 AI をはじめとした先端技術が国民生活、経済社会に大きな変革をもたらす中、研究力やイノベーション力、先端技術を社会へ実装する推進力は、国力に直結しておりその人材獲得競争が激化している。現下の情勢を踏まえ、EU や英国等においては、研究者の受入れを積極的に推進されており、我が国においても、令

和 7 年 6 月に海外在住の日本人研究者も含め、海外からの優秀な研究者の招へいなど国際頭脳循環の取組を強化するための施策パッケージ「J-RISE Initiative」を取りまとめ、特に、緊急的に大学ファンドを活用した海外の優秀な若手研究者等の受入れを行う「グローバル卓越人材招へい研究大学強化事業（EXPERT-J）」を開始している。

- 令和 8 年度から 5 年間の政府全体の方針を示す次期科学技術・イノベーション基本計画に向けた内閣府における議論においても、研究力に関する主な論点として、国際頭脳循環に参画できておらず、国際的に認知が得られていないことに対する方策や、持続的な経済成長や社会課題の解決を実現し、また、経済安全保障の確保を図る観点から、科学的な強みも見据えつつ、我が国が戦略的に取り組むべき重要な技術領域を選定すること、研究インテグリティや研究セキュリティの実装の方策等が挙げられている。

3. 中長期的に取り組むべき事項

- 前回取りまとめにて確認した方向性（（１）開放性を持った研究環境や国際連携の重要性の再確認、（２）今後の国際連携に重要となる研究インテグリティ及び研究セキュリティの確保に関する基本的考え方）に示された事項に加え、以下の新たな情勢変化による要請等も考慮し、その実現に向けて具体的な施策を検討・推進する。

（新たな情勢変化による要請等）

- 最先端の研究をリードしている米国の研究環境に変化が起きる中、研究者・大学院生の国際的な移動にも大きな変化の兆しが見られる。こうした状況において、我が国の国際頭脳循環への出遅れを取り戻すことも念頭に、EXPERT-J の着実な実施等、緊急的な対応を含め、優秀な海外研究者の受入れや我が国研究者の送出しを戦略的に進めていくことが重要である。
- また、令和 5 年度より開始している「先端国際共同研究推進事業/プログラム（ASPIRE）」等の施策により G7 諸国等の科学技術先進国との戦略的な連携・協力が進捗している。こうした取組により、全体としては不十分ではあるものの、これまでとは一線を画す国際研究交流の効果が現れ始めており、一過性に留まらない長期の継続した支援が重要である。さらに、「日 ASEAN 科学技術・イノベーション協働連携事業（NEXUS）」や「インド若手科学頭脳循環プログラム（LOTUS）」等の施策により ASEAN やインドをはじめとしたグローバル・サウスとの知的交流が加速しており、優秀な人材の育成・確保等に向けて継続した支援が重要である。加えて、EU の研究開発支援枠組みである Horizon Europe への準参加に向けた正式交渉が進められており、EU 加盟国との更なる国際共同研究機会の強化に向けて、

準参加を実現すべきである。

- 他方で、大学等における海外からの留学生・研究者の受入れが加速していくにあたり、受入れに伴うアドミニストレーティブな負担が加速度的に増加している。我が国が国際頭脳循環の一拠点として存在感を発揮していく上では、事務体制強化のための資金支援も重要である。
- また、アカデミアにおける受入れに留まらず、学位取得後等に、優秀な人材が我が国に定着し、産業界等にて活躍できる機会を提供していくことは、我が国の経済社会への大きな恩恵となることが見込まれる。そうした中、言語の壁等により受け皿が不足しており、研究発表の場を通じたマッチング機会の創出等が重要である。

4. 具体的に取り組を進めるにあたり留意すべき事項

- 3. を踏まえ、我が国の研究力の強化に向けた頭脳循環や国際連携を戦略的に進めていくため、世界各国とのネットワークの形成や、そのために必要な海外からのビジビリティの向上に向けた取組が前提であるとの認識の上で、具体的に取り組を進めるにあたり留意すべき事項を示す。

(1) グローバルな人材獲得競争やネットワーク化の中で、国際頭脳循環の一拠点としての我が国のプレゼンスの向上

- 頭脳循環の拠点としてのプレゼンス・ビジビリティを向上させるために、どのような拠点を目指すのか、長期的な視点も含め多様な評価軸を持って、明確にしていくことが重要である。海外研究者や留学生を惹きつける上では、欧米の大学等優れた拠点との差異を強調する必要がある。我が国が世界的に強みを有する研究分野や産業分野を際立たせる研究領域の設定等、海外研究者や留学生にとって魅力を感じられる環境とする必要があることに留意すべきである。その際、家族が生活しやすい環境等、研究者自身の待遇の他のニーズにも目を向けることが重要である。
- 海外研究者や留学生を受け入れるにあたり、我が国の研究力向上や経済社会に対する貢献が見込めるかどうかを判断し、選抜するには、論文実績等の CV だけでは不足で、面接評価等が別途必要であり、事務手続きも含め、それにかかる受入れ側の我が国研究者の負担にも留意すべきである。
- そうした中、NEXUS や LOTUS 等のプログラムで得られる人的ネットワークは、より優れた人材を選抜する上で大きな情報となるため、アルムナイのネットワークを整備・トラッキングしていくことが重要である。その際、短期間の国際共同研究プログラムにおいては、プログラムを通じて得られた人的ネットワークが、中長期的な目線で、国際共著の増加等により我が国の研究力向上に貢献すること

が想定されるため、プログラム期間内の論文発出等の短期的な指標だけではなく、得られた人的ネットワークの価値を認識し、そのための指標を開発すべきである。

- 留学生等が我が国に定着し、あるいは、母国に戻り我が国との長期的な連携の架け橋となってもらうためには、就職も含め、一過性ではない一連のグローバルなエコシステムとして考える必要があることに留意すべきである。その際、企業等とのマッチングの場として、大学院レベルの留学生等を主体とした研究活動の発表会の場が有効であり、そのような場を増やしていくことが肝要である。また、産業界とも連携して海外研究者・留学生等を受け入れるプログラムの中で日本語を学ぶ機会を提供していくとともに、我が国の研究環境や研究活動そのものの魅力を積極的に発信していくことも重要である。

(2) 我が国若手研究者の海外の研究機関での研さん機会等の確保

- 頭脳循環が進んでいくためには、海外研究者等の受入れと並行して、我が国研究者の送出しが不可欠であるが、近年、若手研究者にとって海外挑戦へのモチベーションが減ってきていることを認識する必要がある。
- そうした中で、短期間であったとしても、国際場裡にて新たな刺激を受けながら研さんすることが研究者としての成長に大きく益することを踏まえ、経済的支援を充実させていくことに加えて、次のポスト探しに支障が生じることや学内業務に穴を空けられないこと等によって研さん機会が抑制されないよう留意し、我が国のアカデミアの制度、システムが海外挑戦の選択を促進するような環境となる必要がある。
- 国際的に活躍できる研究者のマインドやモチベーションの分析等、国際的な人的ネットワークや国際流動拡大に向けた課題の分析を進め、海外の研究機関での研さん機会を効果的に若手研究者に提供できるようにすることも肝要である。
- また、海外の研究機関での研さん機会の確保とともに、我が国の大学等において国際経験を考慮した日本人研究者の採用・評価の導入を進めることで、若手研究者が積極的に海外へ挑戦しようとする動機付けとなる仕組みを整えることが重要である。

(3) 科学技術・イノベーションを取り巻く国際情勢が変化する中で、国別・分野別の戦略

- G7 諸国等の科学技術先進国・同志国との戦略的な共同研究・国際科学トップサークル参画を進める ASPIRE、ASEAN やインドとの戦略的な人的交流を進める NEXUS 及び LOTUS 等が進捗する中、それぞれの事業の役割分担やフィードバックも踏まえて、その効果を関係施策全体として捉える必要があることに留意すべ

きである。

- 我が国の国民生活や経済社会への貢献を念頭に、相手国から見て国際共同研究の魅力の一つとなっている産業もあることから、我が国の産業界とも連携して、戦略的に注力する分野の共同研究を進めることが重要である。また、人的交流についても、将来的に有用となる人的ネットワークの構築を見据え、戦略的に進めていくことが重要である。
- 国際連携をする上で、相手国と同等の研究セキュリティを確保する必要があるので、情勢の変化等に応じて速やかな対応が求められることに留意すべきである。

令和6年12月20日
科学技術・学術審議会
国際戦略委員会

1. 第6期科学技術・イノベーション基本計画策定時からの変化

○先端技術の著しい進展

- ・生成 AI をはじめとした先端技術の進展速度が加速度的に増大するとともに、あらゆる分野での活用、社会経済システムの大きな変革など、その影響の範囲も広範囲化している。
- ・科学技術イノベーションは経済成長における原動力であり、その重要性が一層増している。加えて、市場やビジネスのグローバル化に伴い、人材獲得も国際化し、先端技術の獲得競争も国際化している。

○地政学的な変化

- ・米中対立やパンデミック、ウクライナ情勢やイスラエル・パレスチナ情勢など、国際情勢の不確実性、世界の安全保障環境の厳しさが増している。
- ・不安定化する世界情勢の中で、経済安全保障の重要性が高まっている。
- ・開かれた研究環境を不当に利用して不正に技術等を搾取しようとする動向への懸念が増大している。

2. 検討にあたっての背景

○開かれた研究環境の中で、研究者が国際的に連携しながら、自由な発想に基づく研究を通じて科学が発展してきたところ。

○コロナ禍を経て、国際交流を再び活性化させるべき時期。一方、国際会議での招待講演をはじめとした国際的な場面での我が国の存在感が大幅に減少するなど、我が国アカデミアが持つ国際ネットワークが、近年弱体化しているとの指摘がある。現存するネットワークをベースに、これを太くし、更に新たなネットワークに活用する残り少ないタイミング。同時に、学部等早期の段階からの国際交流・留学の促進により、将来国際ネットワークに参画する人材を育成することも重要。

○国際連携は、今後、研究の質向上、研究力の維持・確保や、市場・ビジネスのグローバル化の観点から一層重要。加えて、我が国の人口が減少する一方で、国際的に人材獲得競争が激化する中、グローバルに優秀な人材を惹きつけることも一層重要。その際、円安基調や経済的競争力が低下等する中で、我が国の魅力を活かして惹きつけていくことが必要である。

○G7 及びOECD など国際的に、開かれた研究環境を不当に利用した技術流出等の

リスクへの対応の重要性・必要性の認識が強くなり、一層の対応強化が求められている状況。研究インテグリティ及び研究セキュリティの確保が世界的な潮流に。

- 国際交流の再起動や国際連携をさらに推進しつつ、リスクにも対応していくためには、国際的な共通の価値観に基づいた信頼できる開かれた研究環境の確保、共通の価値観へのコミット・実践が一層重要。

3. 方向性

国際的な切磋琢磨を通じて、我が国から卓越した成果が創出され、その実装による社会課題の解決や新たな価値創造を我が国が国際社会の中で主導していけるようにするためには、国際標準の研究環境の確保・維持が重要であり、その基盤である、多様な人材との知的交流を日常的に行うことができる環境が不可欠である。加えて、先端技術の加速度的な発展、国際情勢の不確実性など予測困難な時代に対処し得る国際競争力の強化と経済安全保障の強靱化の必要性が高まっており、国際競争力の源泉として、我が国の技術の優位性や不可欠性を確保していくことが重要となっている。

こうした中、人口減少下に持続的な経済成長を実現していくためには、信頼できる開かれ、魅力ある研究環境を確保し、グローバルに優秀な人材を惹きつけ、国際連携・協力を強化し、研究力・競争力を高めていく必要がある。国際連携・協力に当たっては、その基本であり、G7 やOECD 等で指摘されている、学問の自由・独立性・開放性・相互主義（互惠性）・透明性、研究インテグリティ、研究セキュリティといった共通の価値観を再確認し、より一層確保していくことが重要である。

なお、「3. 方向性」で示す事項の実現に当たっては、文部科学省に留まらない事項もあり、関係府省と連携し取組を進めることが重要であるとともに、具体的な施策について、継続的に検討していく必要がある。

（1）開放性を持った研究環境や国際連携の重要性の再確認

- 多くの国からの人材が協働する、開かれた研究環境の中で、研究者が国際的に連携しながら、自由な発想に基づく研究を通じて科学が発展することは、国際的な共通認識。
- 研究の開放性や国際連携・交流を過度に制限することなく、異なる視点や様々な知的な刺激を享受できる環境を確保し、優れた研究活動を推進し研究力向上につなげるとともに、国際化を加速する必要がある。
- 一方で、科学技術イノベーションは国際競争力の維持・強化に不可欠。経済安全保障の重要性も高まる中、我が国の技術の優位性や不可欠性、技術主権も念頭にしつつ、戦略的な国際連携が必要。特に、新興技術については、その可能性と予期せぬリスクとのバランスが重要であり、国際社会との連携・強調が必要である。

○このため、ボトムアップとトップダウンの特性を活かし、その両輪で国際連携を進めていくことが重要である。

- ・「世界のアカデミアに開かれた国」を国際的に明らかにするため、開放性を持った研究環境を確保し、ボトムアップによる学術交流は、従前どおり、引き続き強化する。
- ・異なる視点で互いに刺激し合い、切磋琢磨できる環境下で優れた研究を推進し卓越した成果を創出していくために、多様性を重視し、国籍や分野を超えた多様な人材との連携を図ることも重要。
- ・科学技術イノベーション競争が激化する一方で、我が国は国際的な頭脳循環の流れに出遅れている状況。政府においては、G7 諸国や欧州といった科学技術先進国・同志国との戦略的な連携・協力を強化し、相対的な研究力低下に歯止めをかけ、国際競争力向上につなげていく必要がある。特に新興技術分野において、国際科学トップサークルへの日本人研究者の参入を加速し、イノベーション創出を国際社会と連携しつつ主導していく。
- ・初等中等教育段階からの国際経験や、留学生・大学間交流を促進することで、留学生モビリティを拡大し、将来の国際頭脳循環の参画に必要な能力の養成や、人的ネットワークの素地を形成することが重要。
- ・加えて、ASEAN やインドなどの重要なグローバル・サウスは、将来的に大きな成長が見込まれる地域。我が国の人口減少を見据えたボリュームゾーンの人材確保だけでなく、対等なパートナーとして、優秀な人材を育成・確保し、我が国のアカデミア・産業界での活躍を加速させる。当該地域との質の保証を伴った双方向の国際交流プログラムの構築・実施等による大学等の一層の国際化も推進し、留学生の受入れを促進する。さらに、魅力あるキャリアパスや雇用機会を示し、優秀な人材を惹きつけるとともに、学位取得後、我が国に留まり活躍できる機会を提供していくことも重要である。
- ・国際戦略や国際連携の検討にあたっては、国際動向や相手国の状況を把握することも必要不可欠。様々な交流を通じ、相手国の政策や研究力をはじめとした国際情勢を把握するための情報を収集・分析・調査することも重要である。

○また、地球規模課題の解決や SDGs の達成を含めて、国際益はもとより国益の確保の観点からも科学技術イノベーション、国際連携の重要性が一層増している。今後の経済活動の発展や持続可能な社会に繋がる研究開発及び、その成果の社会実装の基盤となる基準・ルール作りの国際的な議論に貢献・リードしていくことも重要である。そのためには、産業界からアカデミアなど幅広い関係者を巻き込んだエコシステムを構築し、研究に留まらず統合的に取り組み、イノベーションによる課題解決に繋げていくとともに、国際的な議論も支える実施状況の評価などシステム志向の分

析・研究も重要である。また、地球規模課題の解決や SDGs の達成に当たっては、グローバル・サウスはもとよりアフリカをはじめとした様々な国々との連携も国際益の観点から必要である。

（２）今後の国際連携に重要となる研究インテグリティ及び研究セキュリティの確保に関する基本的考え方

- 改めて、科学の発展やイノベーションの創出には、国際的に連携した、自由な発想に基づく研究が必要不可欠である。そして、国際連携のためには、その基盤として、学問の自由・独立性・開放性・相互主義（互惠性）・透明性といった共通の価値観に基づく、開かれた研究環境が国際的に確保されていることが必要である。
- 一方、近年、開かれた研究環境が不当に利用され、海外への研究の不正流用や技術流出がなされ、ひいては国の経済安全保障に影響を及ぼすリスクが国際的に強く認識されてきている。
- このような中、G7 や OECD においても国際連携の重要性とともに、研究インテグリティ及び研究セキュリティの確保の重要性が指摘され、各国において、リスク評価・軽減等の具体的な取組の検討が進んでいる状況。今後、国際的な共通の価値観に基づく開かれた研究環境を確保し、国際連携を進めるためには、我が国においても研究インテグリティ及び研究セキュリティの確保に関する取組が、これまで以上に求められる。

（研究インテグリティの確保に係る取組）

- 研究インテグリティの確保に関しては、既に政府において対応方針ⁱⁱがとりまとめられているところ。本方針を踏まえ、研究者及び大学・研究機関等の研究コミュニティにおいて、自律的に研究インテグリティを確保出来るよう、関係者が連携し、必要な取組を徹底していくことが重要である。
- 具体的には、研究者は研究活動の国際化、オープン化に伴う新たなリスクを認識した上で、自らの研究活動の情報として、職歴・研究経歴、兼業等の情報、外部機関からの研究資金等の支援の情報等を適切に開示することで、研究活動の透明性を確保し、説明責任を果たしていくことが求められる。そして、大学・研究機関等は、研究者から開示された情報をもとに、適切なリスクマネジメントを実施することが求められる。その際、上述した国際連携の基盤となる共通の価値観を、連携先と共有していることを確認することが重要であるとともに、連携に一定のリスクが想定される場合には、得られるメリットと生じ得るリスクを比較考慮した連携の在り方の検

討が必要である。

○政府はこれらの取組が、関係者の負担に配慮した上で適切に実施されるよう、必要な支援（リスクとして想定される事例の共有、研修教材の整備等）を継続的に行うことが求められる。

（研究セキュリティの確保に係る取組）

○研究セキュリティの確保に関しては、諸外国において用語の定義や捉え方は異なるものの、総じて外国からの不当な影響への対応として、公平性や相互主義（互惠性）等の確保の観点から、取組の検討が進んでいるところ。今後、国際共同研究等の実施にあたり、従来の安全保障貿易管理に係る取組に加え、我が国側においても諸外国と同等の取組が求められていくことが想定される。また、国内においても、経済安全保障上の特に重要な分野をはじめ、特定の研究開発については、先端科学技術に関する情報や技術の流出防止等の取組が必要となると考えられる。

○このため、政府においては、諸外国の事例も参考に、我が国における研究セキュリティの確保に係る取組について、研究コミュニティと連携、議論しながら検討を進めていくことが必要である。

○そのような中、文部科学省においては、本年 12 月 18 日に「大学等の研究セキュリティ確保に向けた文部科学省関係施策における具体的な取組の方向性」をとりまとめた。

○本文書では、大学等における研究に関して、文部科学省関係施策において取り組む研究セキュリティ確保に向けた方策について、基本的考え方と、以下の当面実行に移すべき内容がとりまとめられている。

- ・大学等に研究資金を提供する際に新たに講じる研究セキュリティ確保の取組
- ・大学等における研究セキュリティ確保を支える取組

○文部科学省としては、大学等の状況を踏まえて実効的かつ現実的な研究セキュリティ確保の仕組みを構築していく必要があるところ、本文書に基づく取組を、まずは試行的・段階的に開始し、実行に移すことが重要である。また、大学等としても、自らの研究活動の価値を毀損されないようにすることのみならず、国際的な研究コミュニティの動向や、大学等を取り巻く国内外の社会や政府からの要請に応えていくために、研究セキュリティ確保に取り組んでいくことが重要である。

○研究セキュリティ確保の取組は、諸外国においても試行錯誤されている状況である。国内外における研究セキュリティ確保を取り巻く情勢の変化等に応じて、文部科学省は研究コミュニティと連携しつつ、継続的な検討を行うことが必要である。

i G7「グローバルな研究エコシステムにおけるセキュリティとインテグリティ」(SIGRE) ワーキンググループ「研究セキュリティと研究インテグリティに関する G7 共通の価値観と原則」(2022 年 6 月)において、研究インテグリティは、「我々の研究コミュニティを支える専門的な価値、原則、ベストプラクティスの遵守である。公正、革新的、オープンで、信頼性のある研究環境の中で共同研究の基盤を形成するものである」とされている。また、研究セキュリティは、「経済的、戦略的なリスクや国家的、国際的な安全保障のリスクをもたらす行為者や行動から研究コミュニティを保護する活動が含まれている。特に関連があるのは、研究に対する不適切な影響、干渉、または悪用のリスク、国家、軍隊、それらの代理人、ならびに非国家主体、組織犯罪活動によるアイデア、研究成果、知的財産のあからさまな窃取、ならびに経済、戦略、または国家安全保障面で悪影響をもたらすその他の活動および行為である」とされている。

また、OECD 科学技術産業ポリシーペーパー (130 号)「グローバルな研究エコシステムにおけるインテグリティとセキュリティ」において、「透明性を高め、潜在的な利益相反 (COI) や責務相反 (COC) を開示し、リスクを管理することによって研究インテグリティを強化することにより、研究セキュリティは保護される。研究セキュリティ、すなわち外国の国家や非国家による研究への干渉を防止することは研究インテグリティの強化につながる」とされているように、研究インテグリティと研究セキュリティは相互に関係するものである。

ii 「研究活動の国際化、オープン化に伴う新たなリスクに対する研究インテグリティの確保に係る対応方針について」(令和 3 年 4 月 27 日統合イノベーション戦略推進会議決定)

なお、本方針において、研究インテグリティは、「研究の国際化やオープン化に伴う新たなリスクに対して新たに確保が求められる、研究の健全性・公正性を意味する」とされている。